View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University of Economics Academic Repository

広島経済大学研究論集
第38巻第4号　2016年3月

19世紀後期アメリカにおける作家の宣伝活動
――ホイットマン，トウェイン，ワイルドを中心に[1)]――

本　岡　亜沙子*

はじめに ―表舞台に立つ芸術家たち

フランツ・リスト（Franz Liszt, 1811–86）は，出身地や年齢の近いフレデリック・ショパン（Frederic Francois Chopin, 1810–49）もうらやむほど表舞台の似合う音楽家であった。演奏会で観客を魅了できるリストと違い，衆目に晒されると怖じ気づいてしまうと自分を恥じるショパンは，ライバルに宛てた手紙で苦しい胸中を明かしている（浦久 147）。その後，作曲活動に専念することにしたショパンは，完成曲をほかの音楽家に演奏してもらうことで名を馳せ，他方リストは，複数人による合同演奏会が主流であった当時としては異例のソロ・リサイタルを開き，自分の作品を演奏することで知名度を上げた。

19世紀前半のヨーロッパは，相次ぐ市民革命によって，貴族階級に対する新興勢力としてブルジョワジーが台頭した時代であった。時流の変化に伴い，貴族が重視してきた優雅さや上品さなどの精神的な価値観は，ブルジョアの物質主義的な価値観にその座を譲る。音楽の評価基準も，曲の内容ではなく派手なパフォーマンスに置かれるようになる。営業熱心で，指が6本ずつあるのではないかと噂が飛び交うほど超絶技巧の演奏をするリストは，音楽の新興市場で脚光を浴びる時代の寵児となった。現代のコンサート会場さながら，彼の演奏会場にはリストの熱狂的なファンである「リスト・マニア」が殺到した。彼（女）らは，ヒーローの脱ぎ捨てた手袋を奪い合い，花束の代わりに宝石を投げ込み，町中の公園からむしり取った花で舞台に花吹雪を降らせた（浦久 3–4）。

本来裏方に回る芸術家が，セルフ・プロデュースを施し表舞台に出てくるという芸術の世俗化現象は，1830年代以降のアメリカ出版業界にも当てはまる。その契機となったのは，印刷技術や流通形態，郵便制度の発達であった。大学や一部の名家にのみ流通していた印刷物を一般大衆が手にすることで，読者層が多様化し，出版ブームが起こり，職業作家が登場したのである。

『革命と言語』（*Revolution and the Word*）の著者キャシー・N・デヴィッドソン（Cathy N. Davidson）によれば，1820年代以前のアメリカには，作者が自分の名前を明かさない伝統があった（31–33；92–94）。知識は皆で共有するもので，一個人が金もうけの道具にするものではないという意識がそこにはあった[2)]。ところが出版業界が商業主義の方に舵を切ると，物書きたちは副業ではなく専業として執筆業に従事し始める。彼らは，匿名ではなく著者名をつけて作品を出すようになる。作品が好評を得れば知名度が上がり，固定ファンの獲得や原稿料の増加につながると，当時の文人たちは算段を踏んだわけである。

こうして職業作家が少しずつ増え始める1830年代のアメリカは，ヨーロッパ文学とは異なるアメリカ独自の文学作品を創り出そうと文人たちが切磋琢磨した時代であった。果たして彼ら

* 広島経済大学経済学部准教授

はどのような作品を書き，どのような販売戦略を立て，アメリカの売れっ子作家になろうとしていたのか。本論考では，発展を続ける出版ビジネスシーンのなか，アメリカ作家が行った宣伝方法について，彼らの作品はもちろん，日記や書簡，エッセイにつづられた赤裸々な記録から考察していきたい。

1.　出版興業詩人ウォルト・ホイットマン

本節では，「国民詩人」と称されるほど人気の高かったウォルト・ホイットマン（Walt Whitman, 1819–92）の創作上の創意工夫を，彼の第一作である『草の葉』（*Leaves of Grass*, 1855）における形式と内容の双方から考察していく。

形式面での工夫は二つある。一つ目は作家像の可視化である。ホイットマンは初版の表紙や扉で作者名を明かすことをしていない。彼は名前の代わりに，口絵に肖像画を載せることで自身の風貌を明らかにした。そこには，一張羅を着て気どったポーズを取る紳士ではなく，作業着姿で無造作に立つ，髭面の男が映っている。エヴリマンのようなホイットマンの姿から，作者が施した親近感の演出がうかがえる。

二つ目は惹句である。ホイットマンは第二版の背表紙に，彼の敬愛する詩人ラルフ・ウォールド・エマソン（Ralph Waldo Emerson, 1803–82）から送られた賛辞，「私は大いなる生涯の門出に立つ貴兄に挨拶を送ります」を載せ，いわゆる「帯買い」をする読者に訴えるような宣伝戦略を打ち立てている（本岡 73）。背表紙だけでなく，同版の本文においても彼は，『草の葉』初版に寄せられた書評9編，ならびに，上記の賛辞を含むエマソンの手紙全5ページを無断で掲載している。その手紙に続けて，作者は架空の礼状も載せている。これら一連の文書は，『草の葉』初版の注目度の高さを書評やエマソンの手紙で宣伝し，エマソンの手紙とその返信文をとおしてこの詩集の魅力を読者に伝えようとする作者の販売戦略を浮かび上がらせるものだ（Whitley 1–2）。

ホイットマンが施した工夫は，本の形態のみならずその内容にも及ぶ。その筆頭にくるのが，自由詩の形式を採用した点である。彼は伝統的な韻律や詩形を踏襲せず口語体を採用することで，「わたし（I）」が「あなた（you）」に語りかけるかのような印象を読者に与えた。読者と一対一の親密な関係を取り結ぼうとする詩人の試みは，詩の内容によってさらに強化される。彼が自由や平等，民主主義といったアメリカの独立を称揚する詩のなかに，極めてプライベートな内容の恋愛詩を多数盛り込んだからだ。たとえば「私自身の歌」（“Song of Myself”）に含まれる以下の箇所は，詩人と読者との逢瀬を赤裸々に想像させるものである。

> そういえばいつか澄み切った夏の朝に君といっしょに寝ころんで，
> 君がぼくの尻っぺたを枕にし，それからゆったり寝返りをうってぼくのほうを向いたっけ，
> そのあと君はぼくの胸の肋からシャツをはだけて，むき出しの心臓に君の舌を挿し入れ，
> ぼくの髭にふれるまで手を伸ばし，さらに手を差し伸べてはぼくの足を抱きしめたっけ。（『草の葉』上巻 116–17）

誰かがベッドに横臥した詩人を愛撫している。人間本来のエロティシズムや人間同士の性的合一を全面に押し出す上記のような詩以外にも，男性同士の熱烈な友情や男性の肉体美を力強い言葉で謳いあげる詩も多い。一例のみ挙げると，「眠る人」（“The Sleepers”）では，「声をかければ誰から応えてぼくの恋人に取って代わる，彼がぼくといっしょにベッドから声は立てずに

起き上がる。」（下巻 132）と，男性同士の同性愛的関係が示唆されている。

性の解放を推奨するような官能的で肉体的な恋愛詩に感銘を受ける読者も多かったようだ。事実，ホイットマンの元には男女を問わずファン・レターが殺到した（Blake, “When Readers” 104–08）。ホイットマンはアメリカ国内外を問わず人気であったが，古代ギリシャ的な雰囲気に満ちた作品を手掛けたという理由で，彼はヨーロッパの男性ファンの間でとりわけ好評を博していた（Brasas 114）。彼の虜になり，聖人と崇めていたひとりが，のちに紹介するオスカー・ワイルド（Oscar Wilde, 1854–1900）である（Bergman 612; Blake, *Walt* 166–72）。

しかしこの色男の書く過激な恋愛表現に否定的な反応を見せる人もいた。プロテスタントの国アメリカは，伝統的にヨーロッパに比べて性的表現にとても厳しかったからである。たとえば1740年代，神学者ジョナサン・エドワーズ（Jonathan Edwards, 1703–58）は『アリストテレスの傑作』（*Aristotle's Masterpiece*, 1684）を青少年に「不浄な（unclean）」書物だとみなし，読まないように勧告した。ここで注意すべきは，エドワーズはこの悪徳本を禁書扱いにはしておらず，あくまでそれを読まないよう青少年やその両親たちに注意喚起している点である。ところが19世紀に入ると内容に規制が及ぶ。その検閲の対象には，シェイクスピア（William Shakespeare, 1564–1616）やチョーサー（Geoffrey Chaucer, 1343?–1400），スウィフト（Jonathan Swift, 1667–1745）などの古典作品に加え，聖書，さらには国民作家ベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin, 1706–90）の作品も含まれた。不適切な表現を含むと判断された作品には，該当箇所に修正が入ったり，大胆な削除が施されたりした（Semonche 12–14）。

性的規制に厳しいアメリカの伝統もあり，『草の葉』初版を評価したエマソンも，第三版が出版される折には露骨な恋愛詩を削除するようホイットマンに求めた（Semonche 14; Kaplan 6）。だが，その助言に従わずホイットマンは過激な詩集を出版した。その結果，この問題作は販売中止となったり，返本が相次いだり，多くの図書館から所蔵を拒否されたりした。イェール大学の当時の学長もこの詩集を「裸で町中を歩く」ほど下品だ（indecent）と評した。否定派から袋叩きされたホイットマンはさらに，当時勤務していた内務省を即刻解雇される羽目に陥った（14）。

それにもかかわらず，ホイットマンは『草の葉』の修正に断固として応じない。それは，“Expurgate, expurgate, expurgate! I've heard that till I'm deaf with it. [. . .] Expurgation is apology–yes, surrender–yes, an admission that something or other was wrong.”（Traubel 151–52）と日記で心情を吐露しているように，自己検閲して表現の自由を自ら放棄することに抵抗したからであった。ホイットマンは，作家生命を賭して，性的表現を取り締まる社会的抑圧に屈しなかったのである。しかし逆説的に言えば，物議を醸すような内容を意図的に含めつづけることでホイットマンは，良くも悪くも世間の注目を集め，宣伝費をかけずに自作の存在を知れ渡らせる，いわゆる「炎上商法」を狙っていたとも言えるのである。

2. 文壇の商売人マーク・トウェイン

「国民詩人」ホイットマンと同様，「国民作家」（McParland 43）と称されたマーク・トウェイン（Mark Twain, 1835–1910）も，優秀な宣伝マンであった。本節では，出版形式，なかでも広告を巧みに利用した彼の宣伝活動について詳解していく。

トウェインの代表作のひとつである『ハックルベリー・フィンの冒険』（*Adventures of*

Huckleberry Finn, 1885）は，出版直後にマサチューセッツ州コンコード公共図書館から禁書扱いを受けた曰くつきの作品である。その理由は，南部社会の最底辺に生きる浮浪児の少年が黒人奴隷と友情を育む物語は，あまりに低俗で，青少年に有害だと判断されたことにあった（Fisher 6；井川 13）。

ところがトウェインは，その判断に激昂することも意気消沈することもなく，むしろそれを新作の宣伝に使うという戦略にうって出た。くだんの決定がトウェイン最新作の宣伝になると日刊新聞『セントルイス・ポスト・ディスパッチ』（*St. Louis Post-Dispatch*）が予想したとおり（４），この戦略家は，物議を醸した同作品が世間の注目を集めていることに喜びを隠せない。『ハックルベリー・フィン』の出版を援助した親戚チャールズ・L・ウェブスター（Charles L[uther] Webster, 1851–91）に宛てたトウェインの手紙を見てみよう。

> Dear Charley,
> The Committee of the Public Library in Concord, Mass. Have given us a rattling tiptop puff which will go into every paper in the country. They have expelled Huck from their library as “trash and suitable only for the slums.” That will sell 25,000 copies for us sure.（Twain, *Letters* 452–53）

話題の書が２万５千部売れると確信していたトウェインは，時機を逃すまいと早速，「マーク・トウェインによる新刊『ハックルベリー・フィン』がマサチューセッツ州で販売禁止に。いかなる理由かと言えば，書かれた話が，あまりにも卑猥，猥雑」（エンゲル 246–47）という文面を新刊案内のチラシに堂々掲載した。この広告を目にした人々はよほど刺激に飢えていたようで，その猥雑な作品をぜひ読もうと本屋に駆けつけた。ところがひとたびページをめくると，友達想いの白人少年と黒人奴隷の友情に読者は心を打たれる。読者の「口コミ」で『ハックルベリー・フィン』はたちまち人気作品となり，先月比３倍の販売実績を上げた（246–47）。

このようにトウェインは金儲けのために執筆する作家であった[3)]。彼の文才と商才は，予約出版方式で自作を販売することで一層際立った。この予約出版方式は，作者や出版社，顧客のいずれにも利点が多い商法であった（Trites 117）。まず作者側の利点であるが，著作権が確立しておらず再版や海賊版が続出し，既得権益を得られないことに当時の物書きは頭を悩ませていた。トウェインはそこで，自分の作品を予約販売のみで売ることにした。消費者が出版社から直接品物を買うことで，作者ならび出版社に利益が還元される仕組みを作ったのだ。出版社側のメリットは他にもある。販売前にある程度の売り上げを把握することで，出版部数を調整し，在庫を減らせるという利点である。さらに予約出版方式は，手近に本屋や図書館の無い田舎町の住民にとっても，自宅にいるだけで行商人が本を運んでくれる便利な購入方法であった。

この予約出版方式を利用した書籍販売を行なう上で，トウェインは二つの戦略に出た。一つ目は，都市部だけでなく田舎の人たちの読書に対する需要にも応えることであった。そこで彼は，広告で求人募集し，大量の外交員—多くは南北戦争の退役軍人や戦争未亡人—を雇い，担当地区を割り振り，そこの家庭に飛び込みで営業させたり，チラシを郵送させたりした。彼らセールスマンは，表紙，目次，印象的な場面の本文やイラスト，推薦文の載った内容見本を人々に見せながら商品を宣伝して回った（McParland 48；中垣 280–84）。“I have always hunted for bigger game–the masses.”（qtd. in McParland 80）とのちにトウェインは伝記作

家の A・B・ペイン（A. B. Paine）に野望を打ち明けているが，ビジネスを手広く展開したいトウェインにとって予約出版制度は有効な販促方法であったのである。

二つ目の戦略は，顧客の需要に合わせて商品をカスタマイズした点にある。出版社や取次業者，書店など，出版業界にインフラが起こり，書物の大量生産が可能となった時代に，トウェインはあえて大量出版された画一的な商品ではなく，顧客のニーズに合わせた商品やサービスを提供した。装丁ひとつとっても彼は，クロス装丁や革張り豪華版など，いくつかのランクを設けていた。予約出版が主なターゲットにしていた田舎町では，大判サイズの蔵書がステータスシンボルとみなされていたため，高価でも重厚感のある書籍が売れたのである（McParland 5）。このようにトウェインは，通常の書籍とは異なるサービスを提供することで，ビジネスの全国展開を目指したのである。

3.　自作自演屋オスカー・ワイルド

自分の名前や作品，その広告を媒介して宣伝活動に励むのがトウェインならば，オスカー・ワイルドは，作品よりもむしろ自分自身を芸術作品として売り出していた。ワイルドは平常から舞台俳優気どりで振る舞っていた。そのため彼は，同時代の著述家マックス・ノウダウ（Max Nordau, 1849–1923）から「エゴ・マニア」という病名を与えられたこともある（宮崎 43–44）[4]。ワイルドが過剰な自意識を持っていたことを物語るエピソードには枚挙に暇がないが，彼がニューヨーク港の税関検査所で申告するものが無いか問われた時，自分の才能を申告したという逸話を挙げれば事足りるだろう（Morris 1）。

この自己顕示欲の強さは，母親譲りのものかもしれない。アイルランド出身の詩人であったジェイン（Jane Francesca Speranza Wilde, 1821–96）は，自分を，縁もゆかりも無いはずのイタリア人詩人ダンテ・アリギエーリ（Dante Alighieri, 1265–1321）の末裔だと信じこみ，公言するほど思い込みの激しい人物であった。旧姓エルジー（Elgee）がイタリア系特有の姓 Algeo の転訛だとする一族の伝説を，妄想の中で改変した彼女は，さらに Algeo をダンテの姓アリギエーリ（Alighieri）の転訛だと解釈していたのである。自称ダンテの末裔である彼女は，自分の名前をフランセスからイタリア風のフランセスカに変え，イタリア風のスペランザという名前をしばしば使い，イタリア人になり切ろうとした（宮崎 6）。

その息子オスカー・ワイルドも話題作りに忙しかった。彼は奇抜な服装で人の目を引き，著名な美術評論家をパトロンにつけて多くの知己を得，新進気鋭の女優との恋愛スキャンダルで世間を賑わせ，辛辣なウィットで社交界を盛り上げた。

しかしワイルドがこうして社交界の花形に躍り出たのは，彼の作品が評価されてのことではない。事実，第一作の戯曲も，第二作の詩集も，先行作品をなぞっただけの剽窃まがいの作品だという酷評を受けており，後者にいたっては献本を母校オックスフォード大学の大学図書館から突き返されてもいる。作品の評価は芳しくないものの，ワイルドの振る舞いは人々の関心をおおいにそそった。その注目度の高さゆえ，美意識の高い彼を揶揄したキャラクターの登場するサヴォイ・オペラ『忍耐，またはバンソーンの花嫁』（*Patience, or Bunthorne's Bride*, 1881）がイギリスで公演され，大当たりした[5]。ウィリアム・S・ギルバート（William S. Gilbert, 1836–1911）脚本，アーサー・サリヴァン（Arthur Sullivan, 1842–1900）作曲によるこのオペラは，大西洋をまたいだニューヨークでも再演される。幸運なことにワイルドは，劇の興業主リチャード・ドイリー・カート（Richard D'Oyly Carte,

1844–1901）から，劇の告知を兼ねたアメリカ講演旅行を依頼される。

唯美主義をテーマとしたこの講演旅行は当初約３か月の予定であった。しかし，大きく三つの理由から人気が沸騰したため，講演は約１年に延長される[6)]。一つ目の理由は，オペラ『ペイシェンス』の人気，なかでもワイルド風の登場人物である官能派詩人レジナルド・バンソーン（Reginald Bunthorne）の人気にあやかったものである[7)]。たとえばハーバード大学での講演会では，バンソーンに扮した同大学の学生60名が，頭髪のカツラと揃いの燕尾服，半ズボンを身にまとい，大きな百合の花をボタンホールに挿し，ひまわりを手に，講演会場の最前列を占領したという（Morris 81–83; Friedman 127–29）。この事象からも明らかなように，ワイルドの講演会は，彼の一挙一動を真似したい観客が一堂に会する見せ物と化していた。

二つ目の理由は，観客のニーズを的確に捉えるワイルドの鋭い嗅覚にあった。『ペイシェンス』の主人公バンソーンさながら，この伊達男は貴族風の衣裳をまとって壇上に上がり，クイーンズ・イングリッシュで唯美主義―芸術のための芸術―について弁をふるった。

最後の理由は，ワイルドのセルフ・プロモーションの才にある。講演旅行前から彼は自己演出を得意としていたが，その才能をさらに開花するように後押ししたのは彼の憧れの人ホイットマンであった。念願叶い，アメリカ講演中に二度も彼と面会できたワイルドは，作家の肖像画を載せた『草の葉』のように，メディアを活用しながら効果的に広報戦略をするよう助言を受けている（Friedman 109–15）[8)]。

美を追究することについて，ワイルドは魅了されつつも，それが孕む危険性も意識していた。それは，「あらゆる芸術は表面であるとともに象徴でもある」（168）と序文に書かれた彼の代表作のひとつ『ドリアン・グレイの肖像』（*The Picture of Dorian Gray*, 1890）からも確認できる[9)]。美青年の主人公ドリアン・グレイが社交界で享楽と背徳の限りを尽くしていると，生身の彼ではなく，肖像画が醜く変わり果てていくという本書の内容は，外見にこだわる人間を揶揄する作者の意識を垣間見せる。モデルとなった人間と肖像画の関係，延いては美／醜や表面／内面の関係における逆転現象からは，人生を芸術化しようとした作家の生き様や，その仮面性が浮かび上がってくるのである。

以上のように，ワイルドにとって自分自身は商品であると同時に，作品であり宣伝材料でもあった。だからこそ彼の作品や講演，宣伝活動はすべて作家に収斂されるように繰り広げられていたのだ。

お　わ　り　に

本論考では19世紀後期アメリカの文壇で活躍した作家三名の宣伝活動を詳解した。ホイットマンは，作者像の視覚化や惹句，作者と読者の一対一の親密な関係を促す詩のテーマなど，さまざまな付加価値をつけることで詩集のブランド化を目指した。詩集の内容が過激すぎて読者の反感を招くこともあったが，良くも悪くも『草の葉』全六版は世論を沸かせることに成功したのである。トウェインは，炎上商法と言っても過言ではないほど広告を巧みに利用することで，世間の注目を集めようとした作家であった。彼のビジネスセンスが特に光ったのは，大量生産の時代に逆行するかのように，予約出版方式を取り入れながらカスタムメイドの書籍販売を行なった点にある。作品の形式や内容，そして出版形式にこだわりをみせた上記二名の作家と違い，ワイルドは自分自身をまず宣伝し，その知名度を利用して作品や講演の成功を目指した作家であった。このような三者三様の宣伝戦略を概観すると，発展する出版ビジネス界のなかで19世紀後期の物書きたちが売れっ子作家

になるため，いかに試行錯誤していたのかが窺えるのである。

本研究は JSPS 科研費26770112の助成を受けたものである。

注

1) 本論考はシティカレッジ（広島経済大学公開講座）2015「知っているようで知らないアメリカのこと」（全４回）における担当回「ザ・ベストテン―文芸アメリカン・アイドル48全員集合」（2015年11月17日）の発表内容に加筆修正を加えたものである。
2) 女性の物書きが匿名にした理由については Davidson 93–94を参照。彼女たちの職業意識はあくまで書き物ではなく家庭に根付いていた。
3) トウェインの商才は，商標登録済の「マーク・トウェイン」印グッズのなかでも一番の売れ筋商品であった「マーク・トウェインのスクラップブック帳」にも見られる。スクラップ帳については Garvey 60–87を参照。
4) ノウダウは，脳の神経細胞が「変質（ディジェネレーション）」することで病気になるとされた19世紀の医学概念を社会・文化的に応用し，当時一流の作家や思想家たちのいずれにも遺伝による脳の変質的失調を見立てた。
5) Savoy Opera。19世紀後期のヴィクトリア朝イングランドで発展したコミック・オペラの一形式。
6) ワイルドにセルフ・プロモーションの重要性を認識させたアメリカ講演旅行の意義については Guy and Small 33を参照。
7) アメリカ講演中のワイルドの服装については Adams 98–99に詳しい。
8) ワイルド人気は，関連グッズの多さからも確認できそうだ。まるで昭和のアイドルのように，写真家ナポレオン・サローニ（Napoleon Sarony, 1821–96）によるブロマイドが１枚５ドルで飛ぶように売れた（Morris 5）。
9) 『ドリアン・グレイの肖像』も，フランス人作家ジョリス＝カルル・ユイスマンス（Joris-Karl Huysmans, 1848–1904）の『さかしま』（*A Rebours*, 1884）の影響を受けてワイルドが創り上げた本である可能性が高い。双方の関係性について，そしてワイルド自身の証言については Wilde, *Complete Works* 394に詳しい。

引 用 文 献

Adams, Amanda. *Performing Authorship in the Nineteenth-Century Transatlantic Lecture Tour*. Surrey: Ashgate P, 2014. Print.

Blake, David Haven. *Walt Whitman and the Culture of American Celebrity.* New Haven: Yale UP, 2008. Print.

_____. "When Readers Become Fans: Nineteenth-Century American Poetry As a Fan Activity." *American Studies* 52（2012）: 99–122. Print.

Bergman, David. "Endowed by Their Creator: Queer American Literature." *A Companion to American Literature and Culture.* Ed. Paul Lauter. New York: John Wiley & Sons, 2010. 608–20. Print.

Brasas, Juan A. Herrero. *Walt Whitman's Mystical Ethics of Comradeship: Homosexuality and the Marginality of Friendship at the Crossroads of Modernity.* Albany: State U of New York P, 2010. Print.

Davidson, Cathy N. *Revolution and the Word: The Rise of the Novel in America.* 2nd. ed. New York: Oxford UP, 2004. Print.

Engel, Elliot. *A Dab of Dickens and a Touch of Twain.* New York: Pocket, 2002. Print.（エリオット・エンゲル『世界でいちばん面白い英米文学講義―巨匠たちの知られざる人生』藤岡啓介訳，東京，草思社，2006年）

Fisher, Victor. "'*Huckleberry Finn' in Concord.*" *The New York Herald* 18 March 1885: 6. Print.

Friedman, David M. *Wilde in America: Oscar Wilde and the Invention of Modern Celebrity.* New York: Norton, 2014. Print.

Kaplan, Justin. "Whitman, Twain, and the 'Unkillable' *Leaves of Grass.*" *The Mickle Street Review* 8（1986）: 5–9. Print.

Kemeny, P. C. "'Banned in Boston': Moral Reform Politics and the New England Society for the Suppression of Vice." *Church History* 78. 4（2009）: 814–46. Print.

Garvey, Ellen Gruber. *Writing with Scissors: American Scrapbooks from the Civil War to the Harlem Renaissance*. New York: Oxford UP, 2013. Print.

Guy, Josephine M., and Ian Small. *Wilde's Profession: Writing and the Culture Industry in the Late Nineteenth Century.* Oxford: Oxford UP, 2000. Print.

"Huck Finn under Ban." *St. Louis Post-Dispatch* 17 March 1885: 4. Print.

McParland, Robert. *Mark Twain's Audience: A Critical Analysis of Reader Responses to the Writings of Mark Twain.* Lanham: Lexington, 2014. Print.

Maslan, Mark. *Whitman Possessed: Poetry, Sexuality, and Popular Authority.* Baltimore: John Hopkins UP, 2001. Print.

Miller, James E., Jr. "Sex and Sexuality." *The Walt Whitman Archive.* 9 Nov. 2015 <http://www.whitmanarchive.org/criticism/current/encyclopedia/entry_49.html>.

Morris, Roy. *Declaring His Genius: Oscar Wilde in North America.* Cambridge: Belknap of Harvard UP, 2013. Print.

Moyle, Franny. *Constance: The Tragic and Scandalous Life of Mrs. Oscar Wilde.* London: John Murray,

2012. Print.（フラニー・モイル『オスカー・ワイルドの妻コンスタンス―愛と哀しみの生涯』那須省一訳，東京，書肆侃侃房，2014年）

Railton, Stephen. “The Sales Prospectus.” *Mark Twain in His Times*. 20 Dec. 2015 <http://twain.lib.virginia.edu/marketin/prospect.html>.

Semonche, John E. *Censoring Sex: A Historical Journey through American Media*. Lanham: Rowman and Littlefield, 2007. Print.

Traubel, Horace. *With Walt Whitman in Camden. Vol. 1*. Boston: Small, Maynard, 1906. *The Walt Whitman Archive.* Ed. Ed Folsom, and Kenneth M. Price. 10 Nov. 2015 <http://www.whitmanarchive.org/criticism/disciples/traubel/WWWiC/1/whole.html>.

Twain, Mark. *Mark Twain's Letters: Volume 3, 1869.* Ed. Victor Fischer, Michael B. Frank, and Dahlia Armon. The Mark Twain Papers. Berkeley: U of California P, 1992. Print.

Wilde, Oscar. *The Complete Works of Oscar Wilde. Vol. 3. The Picture of Dorian Gray: The 1890 and 1891 Texts.* Ed. Joseph Bristow. Oxford: Oxford UP, 2005. Print.

_____. *The Picture of Dorian Gray*. 1891. London: Penguin, 2003. Print.（オスカー・ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』仁木めぐみ訳，東京，光文社，2006年）

Whitman, Walt. *Leaves of Grass*. 1855. New York: Barnes, 2004. Print.（ウォルト・ホイットマン『草の葉』全３巻，酒本雅之訳，東京，岩波書店，1998年）

井川眞砂「アメリカ合衆国における『ハックルベリー・フィン』論争―黒人描写と人種主義をめぐって」『国際文化研究科論集』第12号，2004年，13–29頁。

浦久俊彦『フランツ・リストはなぜ女たちを失神させたのか』東京，新潮社，2013年。

中垣恒太郎『マーク・トウェインと近代国家アメリカ』東京，音羽書房鶴見書店，2012年。

宮崎かすみ『オスカー・ワイルド―「犯罪者」にして芸術家』東京，中央公論新社，2013年。

本岡亜沙子「19世紀中葉アメリカ文学におけるセレブ作家の登場―ルイザ・メイ・オルコットを中心に」『広島経済大学研究論集』第37巻第４号，2015年，71–81頁。